

挨拶にて御座候。か様の挨拶申者は外に一人も無之候。さすが内匠子孫と存候。

一、荻生徂徠等異端邪説を唱へ候事

荻生惣右衛門死去の事先書に申入候。頃日日外其元へも遣候俗書をも板行候て、若年寄本多伊豫守殿序を書被申候。百世の公論を不待して世上に誹笑仕由に候。人性善に候故、是程衷申候をも、若年寄衆の序文にても、上よりも特旨を以て去年御目見被仰付候ても同心不仕候。上方邊の學者も色々邪説を唱へ申候。頃日鈴木貞齋と申人、只今大坂に居申候淺見重次郎門弟にて候。定て中泉氏などは知り被申にて可有之候。此人獨り山崎家の神道に同心不仕候。頃日貞齋より申越し承候へば、山崎嘉右衛門なども見限り果候。湯武を纂弑と申由伯夷が見にて候や、終に中國にても漢唐以來不承異説にて候。貞齋も師門之祖に候得共、一圓合點不仕候。其外伊藤が門流異説を申候得共、是は結句夫程の害は無之候。山崎が流神道に荷擔いたし候旨。大に正道を害し候由不及是非と存候。當地にて宋儒の説を守り候者は、師儒と稱し申内には無之候。老夫一人にて候。大厦の頽一木

の所支に非候得共、所聞を尊び所知を行ひ候て一生を終へ申覺悟に候。

禮幹按、明永樂二年七月、饒州鄱陽縣儒士朱友季。詣闕獻所著書。專毀濂洛關閩之説。肆其醜詆。上覽之怒曰。此儒之賊也。李至剛解縉等請賞於法。揚士奇曰。當毀其所著書庶幾不誤後人。上從之。即遣行人押友季還饒州。會司府縣官聲其罪。杖之悉焚其書。愚謂。罪狀生當如是。

一、神童の書と歌

享保十三年夏五月、東都堀留町商人吉兵衛せがれ善三郎今年四歳也。月晦生。町奉行大岡越前守役所へ被呼出、大文字を書申候。且又同月水戸侯與方にて八歳の女子の歌。

美しき御庭の花の手まりこそ一二三四いつもさけかし

一、備後三坂山の獵師大蛇を射止む

奥平大膳大夫殿領内、備後州神石郡新免村獵師次郎兵衛・六太夫兩人、享保十二年未十月上旬鹿笛に參り、三坂山と申笹山六分許上り候が、身を隠し留り屋へ入り、明六時に及び笛を吹候所、二百間許隔て長さ二十間程の材木を挽候様

に相聞え、如大風搖動し百五十間許も參り候。兩人居申所場よりは漸く五十間許に罷成、五六尺の笹のうへに首一尺程の大蛇見え候。六太夫逃可申由申候所、次郎兵衛申候は、即時に百五十間許走りし程の儀、縦ひ逃候共難叶儀に候得ば、兩人踏留り命限に鐵炮を打可申とて、三四匁の小筒にてねらひ、兎角近寄候て可然と存じ、六太夫又笛を吹候所、六間許に成り笹の上に首をもたせ、四五尺許指上候に付、兩人一度に打申由。其儘蛇は首を笹の内へ隠し尾先を擧候よし。兩人共とやを出で谷合五六町程行、百姓の家へ入り正氣を失申候。所の者共藥を與へ息出申候。晝過に成り正氣付、其所庄屋方へ斷り、うはばみ打候間見届申度申に付、百姓五十人許名主召連れ彼場へ參り見申候所、木枝等悉打折候て、長十三間首五尺一寸廻の大蛇死居申候。鐵炮は眼と鼻とに中り候。役人共首を切り、豊前國中津へ致持參候。鱗大は五六寸、小二三寸。

一、中村揚齋の教訓

享保十三年乙巳十月七日先生話  
僧法然黒谷に道場を設て、一方は信不退の座、一方は行不退の座と名づけ、其徒を集めぬ。其意は修行と信仰と何れか

重き、其志の趣に任せて其座に着くべしと也。多くは修行の重きを以て行不退の座に着し、信不退の方は人少し。熊谷直實發心の時節にて其所へ行き、人の多少を看ておもへらく、我等は人の少き方を助くべしとて信不退に着きぬ。是は武士の意地の未退しゆえと聞候ひぬ。扱法然出で座に着くを見れば、信不退に着きけりと云事あり。信仰の深きものは必修行不懈もの也。中村揚齋是を以て門弟に示しぬ。云。近世以來王世貞・李卓吾等の新奇の學を好て、程朱等の實學をば宋儒の經學と名付けて、誹謗する輩多く流布す。故に初學の者疑信相半し、所從を不知。程子・朱子にだまさるゝとおもひ、疑心を退け信仰を宗として學びなば、遂には眞實の道に赴くべし。法然がいゆる信不退の如くすべしと也。

一、鈴木貞齋、神道説を鳩巢に質す

大坂に山崎流の儒者鈴木貞齋といふもの、神道を好み篤實に學を好む。此者酒井讚岐守家の儒生松田清八郎字は子強を頼て、先生へ疑を質し候。其趣は神道三部の書に、神人の生國を陰神先づ唱へ、或は男女嬖會の道を鶴鶴に學て初て